



2007.7.1

林訳イブセン冤罪事件 .....樽本照雄 1  
 無中生有的最早林譯《葛利佛利葛》...馬 泰來15  
 ビーストンの謎 .....渡辺浩司18  
 “夢湘先生” 點滴 .....武 禧27  
 晩清小説作者掃描(拾巻) .....武 禧29  
 清末小説から14、31 翻訳小説に関する文章が  
 集まりました。林紓については、原作探索に余  
 地が残されています。そこから明らかになりつ  
 つあるのは、驚くべき事実です。林訳シェイク  
 スピア、イブセンが冤罪であっただけではあり  
 ません。五四直前に展開された林紓批判そのも  
 のが怪しい。魯迅が林紓批判を行なっている

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

### 林訳イブセン冤罪事件

樽本照雄

林訳には、大きな欠陥がある。そのひ  
 とつは、もとの戯曲を小説体書き改め  
 たことだ。こう指摘され、批判されてき  
 た。関連論文を書いた研究者の多くがそ  
 の見解を支持している。だから、これが  
 学界の定説であり通説でもある。

### シェイクスピアのばあい

代表的な例は、林訳シェイクスピアだ。  
 といっても『吟辺燕語』では、ない。こ  
 の底本は、ラム姉弟の『シェイクスピア  
 物語』だとわかっている。ゆえに、ここ  
 では述べない。戯曲を小説化したと批判  
 されるのが、以下の歴史劇についてなの  
 だ。

林紓が陳家麟と共訳して1916年刊行の  
 『小説月報』に掲載したのが、「リチャー  
 ド2世 RICHARD II [雷差得紀]」、「ヘン  
 リー4世 HENRY IV [亨利第四紀]」お  
 よび「ジュリアス・シーザー JULIUS  
 CAESAR [凱徹遺事]」だった。また、単  
 行本の『ヘンリー6世 HENRY VI [亨利  
 第六遺事]』(上海商務印書館1916.4 説部叢  
 書第3集第1編/上海商務印書館 林訳小説  
 叢書第2集第15編)などもある。

英国シェイクスピア [莎士比] 原著と

だけしか書かれていない。林紓+陳家麟の漢訳を見れば、それが小説体になっている。だから、鄭振鐸は、もとの戯曲を翻訳して小説化したと断定した。作品の体裁を変更するという恣意的なその翻訳態度を批判したのだ。

だが、事実は異なる。

林訳シェイクスピアには小説化本があった。もとの劇本をイギリス人作家が小説化したものだ。何かといえば、クイラー=クーチ A. T. Quiller-Couch 『シェイクスピア歴史物語 Historical Tales From Shakespeare』(Edward Arnold, 1899)である。

この新発見は重要な意味をもつ。

林紓は、シェイクスピアの原作にもとづき、そこから直接翻訳して小説化した、といままでは考えられてきた。だから、批判はそこに集中した。くりかえして申し訳ない。1924年の鄭振鐸にはじまる。これが、間違っていたことが証明されたのである。

ことばをかえれば、シェイクスピア原作と林訳のあいだには、もう1種類の英文原作がはさまっていた。すなわち、林訳は、シェイクスピア原作に直接もとづいたのではなく、それを小説化したクイラー=クーチ版を翻訳した。もとは小説化本なのだから、漢訳が結果として散文になるのは当然のことだ。

林紓は戯曲と小説の区別がつかなかった、と批判した鄭振鐸の方が誤っていたことになる。林紓にとってみればとんでもない濡れ衣だし、まったくの冤罪だっ

た。学界に定説として存在していた従来の林紓批判は、根底からくつがえる。

鄭振鐸は、林訳シェイクスピアのみならず、林訳イブセンについても同様の批判を行なっている。

イブセンのばあい

ヘンリック・イブセン(Henrik Ibsen, 1828-1906)は、説明するまでもなくノルウェーの劇作家、詩人である。

本稿の主題は、林紓が翻訳したイブセン作品についてだ。原作は「幽霊」、漢訳名を『梅孽』という。

鄭振鐸は、林訳の欠陥をあげてシェイクスピアとイブセンを併記した。ゆえに、その批判は同じ場所に出てくる。

鄭振鐸「林琴南先生」(『小説月報』第15巻第11号1924.11.10。傍線省略)からイブセンの部分だけを引用する。

イブセンの『幽霊[群鬼(梅孽)]』などすべて彼は翻訳して別の本に変えてしまった 原文の美しさと風格、および重要な対話は完全に消滅してしまっただけでなく、これはまったくチャールズ・ラムが『シェイクスピア物語』で行なったことにならなもので、なぜ「原著者シェイクスピア」「原著者イブセン」と書かなくてはならないのか。林氏はたぶん小説と戯曲の区別があまりはっきりしていなかったのだろうが 中国の旧文人は小説と戯曲の区別をつけることができず、たとえば『小説考証』と

いう本は、小説といいながら無数の伝奇をそのなかに含ませている  
 しかし、口述翻訳者は彼になぜいかなかったのだろうか。易卜生の群鬼(梅孽)都是被他訳得变成了另外一部書了 原文的美与風格及重要的對話完全消滅不見, 這簡直是步武却爾斯、蘭在做莎氏樂府本事又何必写上『原著者莎士比亞』及『原著者易卜生』呢? 林先生大約是不大明白小説与戲曲的分別的 中国的旧文人本都不会分別小説与戲曲, 如小説考証一書, 名為小説, 却包羅了無數的伝奇在內 但是口訳者何以不告訴他呢? 9頁

上の記述が、まさか誤りだとは、のちの研究者全員は想像することすらしなかった。検証を試みた人がいなかったとは思わない。だが、結果として誰も異論を提出していない。研究者は、鄭振鐸の意見は正しいものだと思つたのだろう。そう考えて間違いはない。鄭の賛同者は現在にいたるまで多数にのぼる。

鄭振鐸の批判をそのまま受け入れた実例を示せば、(曾)虚白編、蒲梢(徐調孚)修訂『漢訳東西洋文学作品編目』(真美善書店1929.9.28)がある。翻訳文学の目録だ。詳しい説明があるわけではない。だが、断片にこそ定説が凝縮されて出現する。その43頁に「梅孽(文言, 改訳為小説) / (Ghosts) 林紓 商務」と書いてある。カッコのなかにわざわざ「文言、小説に改訳した」と説明を加えたのは、徐

調孚だと考えられる。なぜならば、この目録のもとになった(曾)虚白「中国繙訳歐美作品的成績」(『真美善』第2巻第6号1928.10.16。19頁)には、上に見える説明はついていないからだ。徐調孚が鄭振鐸の説明を取り入れたのは、研究の成果だ。しかも、読者の便宜を考えてことばを加えた。

寒光の『林琴南』(上海・中華書局1935.2)は專著だから、当然、『梅孽』にも言及がある。説明して「劇本を小説にあらためた」(109頁)という。寒光も鄭振鐸の説を受けいれているのは明白だ。

阿英は、一貫して林訳を称賛している。林訳シェイクスピアについては、たぶん故意に小説化には触れない。ところが、イプセンに関しては次のように書く。

当時の名翻譯家林紓も『幽霊[群鬼]』を『梅孽』に改訳して[改訳成]出版した。<sup>\*1</sup>

表現に注意してほしい。「翻譯して[訳成]」ではなく「改訳して[改訳成]」なのだ。この小さな箇所から、鄭振鐸と同様に阿英も戯曲の小説化を認めていると理解できる。

そのほかは以下のようなになる。わずらわしいから著者とその文章名だけを示す。林訳シェイクスピア冤罪事件と多くの部分で共通するのはいうまでもない。だが、数はそれにくらべて減少している。言及する余裕がなかったのか、気がつかなかったのか、そこまではわからない。

- 吳文祺「林紓翻譯的小説該給以怎樣的估價？」鄭振鐸、傅東華編『文学百題』上海生活書店1935初出未見／香港・古文書局影印1961.6再版／上海書店影印1981.6。447-448頁
- 宋雲彬著、小田嶽夫、吉田巖邨共訳『中国文学史』創元社1953.7.15。165頁
- 蒲梢(徐調孚)「漢訳東西洋文学作品編目 一九二九年三月止」張静廬輯註『中国現代出版史料甲編』北京・中華書局股份有限公司1954.12上海初版。289頁
- 復旦大学中文系1956級中国近代文学史編写小組編著『中国近代文学史稿』北京・中華書局1960.5。采華書林影印1962.2.15。286頁
- 曾錦漳「林訖小説研究(上)」『新亞学報』第7卷第2期1966.8.1。234、249頁
- 細谷草子「新時代への啓示(翻譯小説の様相)」内田道夫編『中国小説の世界』評論社1970.12.10。282頁／1989.4.30三刷
- 任訪秋「林紓論」『開封師院学報』1978年第3期初出未見。薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』福州・福建人民出版社1983.6 中国現代文学史資料彙編(乙種)。376頁
- 康來新『晚清小説理論研究』台湾・大安出版社1986.6。281頁
- 周振甫「林紓」『中国大百科全書・中国文学』北京・中国大百科全書出版社1986.11。432頁
- 北京図書館編『民国時期總書目(1911-1949)』外国文学 北京・書目文献出版社1987.4。311頁
- 任訪秋主編『中国近代文学史』開封・河南大学出版社1988.11。480頁／2000.8第3次印刷。462-463頁
- 劉波「林紓」呂慧鵑、劉波、盧達編『中国歷代著名文学家評伝』続編三 濟南・山東教育出版社1989.12。664頁
- 郭延礼「“林訖小説”的總体評价及其影響」『社会科学戰線』1991年第3期(總第55期)1991.7.25。284-285頁。のち、郭延礼『中西文化碰撞与近代文学』(濟南・山東教育出版社1999.4)所収。275頁
- 賈植芳、俞元桂主編『中国現代文学總書目』福州・福建教育出版社1993.12。685頁
- 郭延礼『中国近代翻譯文学概論』漢口・湖北教育出版社1998.3。296頁／修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷。234頁
- 聞少華「林紓」熊尚厚、嚴如平主編『民国人物伝』第11卷 北京・中華書局2002.7。324頁
- 程翔章、邱鏄昌編著『中国近代文学』武昌・華中師範大学出版社2003.1。226頁
- 周曉明、王又平主編『現代中国文学史』武漢・湖北教育出版社2004.9。110頁
- 韓洪拳『林訖小説研究 兼論林紓自

撰小説与伝奇』北京・中国社会科学出版社2005.7。125頁

以上は、主として中国近代文学研究者の見解である。外国文学研究者の意見をひとつ紹介しておく。

王寧、葛桂録等著『神奇的想像 北欧作家与中国文化』銀川・寧夏人民出版社2005.12。97頁

「林紆が人と合作してイブセンの脚本『幽霊 [ 群鬼 ]』を小説『梅孽』(1921)に改編した」

これは「中国におけるイブセン [ 易卜生在中国 ]」という章のなかで述べられた文章だ。中国近代文学研究の成果を取り入れていると理解できる。

もうひとつ、演劇研究で、しかも中国におけるイブセンを研究する専門書からも引用する。

譚国根 Kwok-kan Tam “中国におけるイブセン Ibsen in China 1908-1997: A Critical-Annotated Bibliography of Criticism, Translation and Performance” The Chinese University Press, Hong Kong, 2001. p.182

「これ(梅孽)は、幽霊の優美な古文による翻案 adaptation である」「林自身は西洋のいかなる言語も知らなかったから、彼の翻訳はすべて協力者が彼に話すことにもとづいている。幽霊は毛文鍾の助力により林が小説に翻案したもので、林は原作の構造を追わず、彼自身の理解によって物語を改作している」

問題だと私が思うのは、林紆研究ある

いは翻訳研究の専門家たちが林訳批判に参加し加担していることだ。結論が林訳を正の方向で評価するものであっても、戯曲の小説化をいえば、それがそのまま批判になる。

自分なりに考えて鄭振鐸と見解が同じになったのであれば、しかたがない。だが、戯曲を小説化したというならば、少なくともその詳細を明らかにしてもよかったのではないか。原文から漢訳がどのように作られたか、という経過を説明するそのことをいっている。

鄭振鐸は主唱者だから別にしても、とって責任を逃れることはできないが、後の研究者はひとりとして検証し説明しようとはしない。原文と訳文を引用することすらしていない。論文を読んでも、漢訳の検討をしたと具体的にわかるものがない。大いに不満である。

## 林訳イブセン

手元にある林訳本を見る。

『梅孽』全17章

マ マ 德国伊ト森原著 林紆、毛文鍾同訳  
上海商務印書館1921.11 説部叢書第4集第13編。60頁

イブセン Henrik Ibsen の“Gengangere” (1881) 英訳名“Ghosts [ 幽霊 ]”である。

国名をドイツと誤ったことも批判の理由になっている。戯曲を小説化したばかりか、原著者の国籍も間違うほどのデータラメぶりだ、と鄭振鐸は言いたいのだ。



林紓、毛文鍾同訳『梅孽』

漢訳名の『梅孽』は、日本語でいえば『梅の罪』となる。梅は、梅毒を意味する。原作の内容からつけられた訳題名だと理解できる。

林訳巻末には、次のような説明がある。

此書曾由潘家洵先生編為戲劇名曰  
群鬼然該書係用語體本書則為文言互  
相參看獲益良多 校者誌。59-60頁

ここに出てくる潘家洵の「群鬼」とは、易卜生著として『新潮』第1巻第5号(1919.12三版。影印本)に掲載されている漢訳を指す。胡適が訳訳に着手し中断していたのを潘家洵が完成したと「群鬼」前言にある(1919.4.24付)。前年の1918年には『新青年』(第4巻第6号1918.6.15)で

「イブセン特集[易卜生号]」があった。それに『新潮』が呼応した形になっている。

『梅孽』は、イブセンの「幽霊」だ。しかし、同一作品の漢訳「群鬼」が先行している。すでに2年前に訳訳が発表されているが、使用しているのは白話(口語による書面語)だ。そこで文言によって訳訳したから互いに参照すればよいという。文言での訳訳の方にも需要がある、と出版元商務印書館は判断したのだろう。時代の波に乗ろうという意欲があったと見るべきか。

白話と文言の違いはわかる。だが、以上の記述では、潘家洵の訳訳が戯曲のままであり、林訳が散文であることは理解できない。林訳しか読まない人にとっては、特にそうだ。上の注釈をつけた人物は、戯曲と小説の区別をつけなかった、といていいかもしれない。

鄭振鐸の指摘と批判がなされて以来のことだ。林訳によるイブセン戯曲の小説化について、これが定説になっていることは、上に示した研究者たちの文章を見ればわかる。

### イブセン「幽霊」の英訳

イブセンのノルウェー語原作は、当時すぐさま英語、ドイツ語、フランス語に訳訳されたという。林紓の共訳者毛文鍾\*2が理解したのは英語だ。ゆえに、林紓+毛文鍾が漢訳のさいに底本としたのは英訳本だろうと予想がつく。

馬泰来は、「原為話劇，訳為小説。疑拋

英訳本重訳。又林訳誤以伊ト森為徳人」\*3  
だと書いた。もとの戯曲を翻訳して小説  
にした、と彼も断定している。

イプセン原作の第1幕冒頭の場面を英語訳と日本語訳で引用する。

REGINA (*in a low voice*). What do you want? Stop where you are. You are positively dripping.

ENGSTRAND. It's the Lord's own rain, my girl.

REGINA It's the devil's rain, I say.\*4

**レギーネ** (声を抑えたまま) 何の用? そこにじっとして。ずぶ濡れじゃないの。

**エングストラン** ありがたいお湿りじゃねえか。おめえ。

**レギーネ** 悪魔の雨でしょう。\*5

林訳『梅孽』に先行する潘家洵訳「群鬼」の同じ箇所に訳語をつける。

**レギーネ** [瑞琴] (声を抑えていう [低声説]) なんの用なの。止まって、動いちゃダメ。ほら、身体の雨水がしたっているじゃない。你要什麼? 站住了, 不要動。你瞧你身上的雨水直滴下来。

**エングストラン** [安司強] 大工 [木匠] おめえ、こりゃ神さんからの恵みの雨じゃ。我的孩子, 這是上帝的好雨。

**レギーネ** ほんとに悪魔の雨よ。這檢直是魔鬼的雨! \*6

原文通りの白話訳になっていることがわかる。セリフはせりふのままである。翻訳だから当たり前のことだといわれるかもしれない。だが、のちの林訳を見るとき、どれだけ異なっているのか驚くはずだ。

原作の舞台はノルウェー、大きな峡湾にのぞむ屋敷内で物語ははじまる。

劇の大筋を紹介しよう。謎が徐々に明らかになっていく運びだが、ここでは要点だけを述べたい。

冒頭に登場するレギーネは小間使いで、大工エングストランの娘だ。ふたりの主人は、アルヴィング夫人である。彼女の設立した孤児院が明日の開院をむかえることになっている。その地方では名士であった亡き夫の名前を冠して「陸軍大尉アルヴィング記念ホーム」という。孤児院設立に協力したのが牧師マンデルスで、アルヴィング夫人とは、昔親しい間柄だったことがある。夫人は、なんとか表面をとりつくろってはいたが、夫のアルヴィングは放蕩者で人生の落伍者だった。自家の小間使いに生ませたのが先ほどのレギーネだ。身重の小間使いをエングストランに押しつけた。だからレギーネにとっては義理の父親ということになる。そういうことを行なった放蕩者の夫を嫌い、子供を遠ざけるため、夫人は息子オスヴァルをパリに遣っていた。夫の生存中は、息子を会わせようとはしなかったほどだ。そのオスヴァルが画家となってパリからちょうどもどってきている。異

母兄妹のレギーネと恋仲で、しかも父から梅毒をもらった身体であることが判明する。保険をかけていない孤児院は開院を目前にして火災にあい、病気の末期症状があらわれたオスヴァルは、「太陽」といって倒れ込む。

以上の物語が、3幕にわけられ同じ部屋でくりひろげられる。

戯曲が出版されると、全北欧では非難の声がまきおこったという。性病、近親相姦がでてくる側面に批判の目が向けられたのだ。そういう時代だった。

林紓+毛文鍾の『梅孽』が出版されたのは、イブセン原作の発表から40年後になる。

林訳『梅孽』

林訳を見てみよう。戯曲を小説化するとどうなるのか。興味のあるところだ。以下のようにはじまっている。

【林訳】巴黎中有老屋。名曰琵琶室。為一老画師所寓。近有四画師。同居其中。老画師曰和尼。已大有名於巴黎中。和尼藝高名重。本宜別居夏屋。顧恋恋故人。仍濡滞於此。三画師中。一為山特阿。一曰蘭伯潭。一曰保羅。實則和尼之居此屋。亦不專為三友。中有一女子。名曰伯金尼。亦僑寓其中。1頁

パリに古い家屋があって、その名を琵琶屋敷という。ひとりの老画家が住んでいたが、最近、画家4人で同居するようになった。その老画家

は和尼といい、パリではすでに有名であった。和尼は腕が立つし有名でもあり、本来は夏の屋敷にいるべきだったが、友人に恋々として、ここにぐずぐずしていた。3人の画家のうちのひとり山特阿である。ひとは蘭伯潭といい、もうひとは保羅である。実をいえば、和尼がこの屋敷にいるのはもっぱらこの3人のためというわけではなく、なかに女性がいて、名前を伯金尼といい、彼女もここに居住しているのだ。

これは、どういうことか。イブセン原作を知っている人がこの冒頭を読めば、狐につままれた気がするのではなからうか。ありえない、というかも知れない。

イブセン原作の舞台はノルウェーだ。パリはことばの上で出てくるにすぎない。オスヴァルは、パリに長く住んで遊んでいた。しかし、その頃の具体的な描写があるわけではない。ましてや、パリ時代の友人が登場することもない。

ところが、漢訳ではパリを舞台にして物語がはじまる。「巴黎」くらいのことばは、日本語になおすことができる。だが、「琵琶室」あるいは「和尼」「山特阿」「蘭伯潭」「保羅」「伯金尼」といった人名になると私にはまったく見当がつかない。イブセンの原作には出てこない単語だからだ。

これが同一作品の翻訳か、と疑うのが普通の反応だろう。

鄭振鐸は、その狐につままれた人のひ



とりだったと想像する。原作と林訳は、かけ離れている。だから、彼は、林紓たちがもとの戯曲を勝手に小説化した、と考えた。シェイクスピア原作を小説化したのと同じだと断定したわけだ。鄭振鐸は、自分が判断した経過をこまごまと説明しているわけではない。説明もなにも、小説化についてはひとつのものに切っ捨てた。

だが、戯曲を漢訳して以上のようになるだろうか。なると考える方がおかしいといわなければならない。原作と漢訳とは、まったくの別物である。違う筋立てと登場人物を考えるくらいなら、もとの戯曲のままに翻訳する方がよほど簡単だ。手間ヒマかけるまでもない。

翻訳の原作が不明のばあい、中国の研究者は、通常、これは再創作、再創造の作品であると言いはじめる。過去においては、類似の例として呉趼人「電術奇談」とか、魯迅「造人術」がすぐに思い浮かぶ。私は、彼らがよった原作を示し、再創作説、再創造説が誤りであることを証明したことがある。

だが、林訳のばあい、原作は明らかなのである。それにもかかわらず、林紓の翻訳についても、同様のことを言う研究者が出てきた。郭延礼『20世紀中国近代文学研究学術史』(南昌・江西高校出版社2004.12)だ。同じ文章を『中国前現代文学的転型』(済南・山東大学出版社2005.10)に使用している。よほど強調したいことらしい。

「林紓の翻訳は、原著に対する再創造

である」(前者234頁。後者189頁)

郭延礼の説は、林訳イブセンに限定しているわけではない。林訳全体が、再創造だというのだ。これは、すでに翻訳研究の範囲を逸脱していると私には思われる。

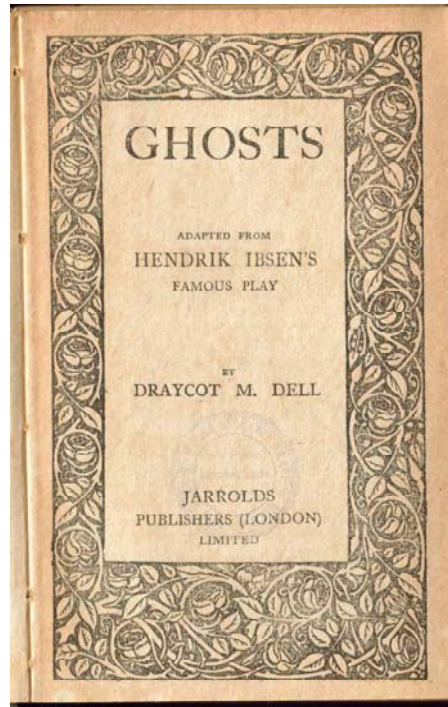
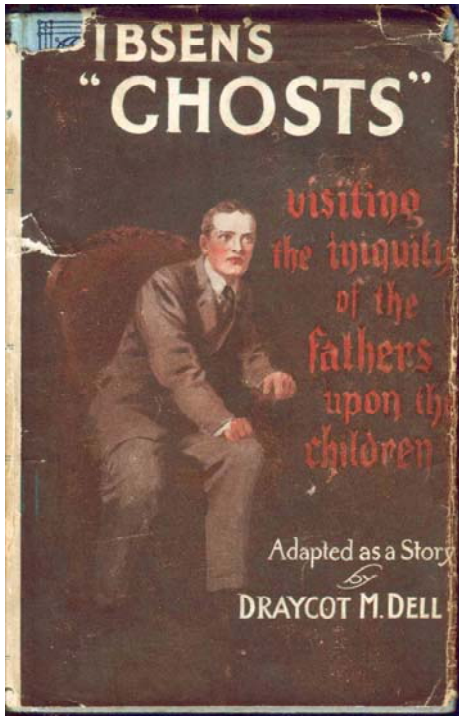
私は、郭延礼の考えに賛成しない。なぜなら、林訳が底本とした作品のいくつかについて、探求がまだ不十分だと考えているからだ。

なすべき探求が行なわれていない。行なわれていないから、林訳シェイクスピアの例に見たように、鄭振鐸の誤りをただすことができなかった。林紓に濡れ衣を着せ続ける結果となったのである。

イブセンの作品は、多数の人々によって英訳されている。「幽霊」の翻訳者としてウイリアム・アーチャー William Archer とか、R・ファークアソン・シャープ R. Farquharson Sharp などを出しても、これでは名前を挙げたうちには入らない。それくらい英訳者は多い。

だが、本稿で追求している英訳「幽霊」は、彼らが英訳したような戯曲そのままではない。小説化して英訳した版本があるのではないか。林紓+陳家麟がシェイクスピアの漢訳で行なったと同じことがイブセンのばあいにも存在しているだろう、という予測のもとに作業を続けている。そう考えないかぎり、原作と漢訳の隔たりが説明できないからだ。

イブセン戯曲の小説化についてとなると、突然に視界が悪くなる。これを紹介する文章には、私は最後まで遭遇しな



IBSEN'S "GHOSTS" Adapted as a Story 表紙と扉

った。シェイクスピア原作の小説化問題を追求した時に、同様の体験をしたことがある。原作についての研究こそが重要だ、書きかえ作品など論外、というのだろう。専門家にとって、小説化された英文原作については探索する意欲がわかないと見える。もしかすると、そのような本があることすら「意表之外」にあるのか。

ひとりで努力するほかない。

そうして見つけたのがつぎの英訳本だ。

イブセン戯曲の英文小説化本 デル版  
『幽霊』

ドレイコット・M・デル Draycot M. Dell  
著『イブセンの「幽霊」物語 IBSEN'S  
"GHOSTS" Adapted as a Story』JARROLDS,

(1920)である。

表紙の題名にあるとおり物語に翻案 Adapted as a Story した英訳本にほかならない。著者は、Draycot Montagu Dell (1888-1940)だ。

扉には“GHOSTS / ADAPTED FROM / HENDRIK IBSEN'S / FAMOUS PLAY / BY / DRAYCOT M. DELL”と表示しており、刊年は記載がない。上の1920年という表示は書店の目録記述によった。

小型本だが「序幕 PROLOGUE」6章、「劇の内容 THE STORY OF THE PLAY」11章の2部構成になっており190頁もある。デル版『幽霊』から少し引用したい。

【デル版】Of these four, Florentin de Vernet had perhaps done most to

achieve repute; for in Paris his pictures were highly spoken of, and fetched a good price. / He could have had other quarters, more sumptuous in surroundings, a little less reminiscent of those days of poverty, but he preferred the House of the Harp, and chose to remain in those dear, dusty old rooms of his first dreams, with Jean Sentier, Anatole Lambertain and Paul Borez. / But there was another consideration also Virgine Dormeuil and perhaps of all consideration Virginie was the chief.

p.2

4人のなかでは、フロレンタン・ド・ヴェルネが、たぶんもっとも成功しているといえる。なぜなら、パリで彼の絵は好評を博し、いい値段で売れるからである。/彼は、貧困の当時を思い出させるくらいの、もう少し贅沢な環境でほかの部屋をもつこともできたが、しかし、彼は「ハーブの家」を好み、ジーン・センチエ、アナトール・ランバートン、ポール・ボレズらと、彼の最初の夢だった、あの大切なほこりっぽい古い部屋にとどまる方を選択した。/しかし、別の動機 ヴァージニ・ドームル もあって、すべての動機の中でヴァージニが最も重要だった。

ここを読めば、先に引用した林訳で不

明だった固有名詞がすべて解決する。すなわち、以下のように対応している(漢訳に該当する個所に下線をほどこす)。

琵琶室 the House of the Harp ハープの家

和 尼 Florentin de Vernet フロレンタン・ド・ヴェルネ

山特阿 Jean Sentier ジーン・センチエ

蘭伯潭 Anatole Lambertain アナトール・ランバートン

保 羅 Paul Borez ポール・ボレズ

伯金尼 Virgine Dormeuil ヴァージニ・ドームル

4人の画家たちにとって、ヴァージニは女王のようだった。彼女を中心にしての共同生活が営まれていたところに、ノルウェー人の画家オスヴァル・アルヴィングが登場する。デル版英文と林訳を並置してみる。

【デル版】It was upon such a scene that Oswald Alving, a young Norwegian artist, was ushered by de Vernet, one evening in late summer. p.5

そんな時だった。晩夏のある夕方、ノルウェー人の若い芸術家オスヴァル・アルヴィングがド・ヴェルネに案内されてきた。

【林訳】一日和尼引一脳威画師垂丁至。2頁

ある日、ヴェルネがひとりのノルウェーの画家アルヴィングを連れてきた。

林訳は、デル版英文をかなり圧縮していることがわかるだろう。

#### デル版原作と林訳

ハーブの家にオスヴァルが加わる。彼はヴァージニと仲良くなるが、病気が悪化し、置き手紙を残してひとり故郷ノルウェーにもどっていった。

ここまでがデル版の「序幕」第6章だ。全190頁のうちの34頁を占める。林訳も同じく第6章だが、全60頁のうちの16頁を費やしている。第6章までの分量を比較すれば、デル版約18%対林訳約27%になる。数字の違いは、林訳はデル版を省略していることを意味している。

つぎに「劇の内容」第1章の冒頭と対応する林訳の部分引用しよう。

【デル版】IT was at evening time that a surprise had come to the dwellers in this house beside the fiord. / Mrs. Alving had been roused by the excited utterances of Regina, her maid, and the next moment was clasping Oswald in her arms, (後略) p.35

峡湾の近くにある家の住人にある驚きをもたらされたのは、夕方であった。ノルヴィング夫人は、小間使いのレギーネの興奮したことばで

目を覚まされた。次の瞬間、オスヴァルが彼女の腕の中にいだかれており、(後略)

【林訳】一日黄昏中。亜丁之母方晏坐。女僕雷迦茵。忽倉皇入言曰。亜丁帰矣。亜丁見母。力抱其身。16頁

ある日の黄昏に、アルヴィングの母はちょうど安らかに座していると、小間使いのレギーネがあわてふためいて入ってきて言った。アルヴィング様がお帰りになりました。アルヴィングは母を見ると、力をこめて抱きしめた。

林訳は、デル版と完全に一致しているわけではない。ゆえに、文章の区切りも中途半端になってしまった。オスヴァルのことを林訳では、亜丁と表示する。レギーネがアルヴィングと呼ぶのは具合が悪い。そこは、オスヴァルとすべきところだ。といっても、林訳は亜丁ではじめてから、母親の方を「母」「夫人」と表示して区別する。これも、ひとつの工夫である。Regina に雷迦茵という漢字を当てている。この漢字を見ると林訳のあの有名な『迦茵小伝』(Joan Haste)を連想してしまう。ここでは、それとはまったく関係がないのだが、思い浮かぶのだからしかたがない。

つぎの箇所からイブセン原作と重なる。デル版と林訳の両者を引用する。

【デル版】Regina frowned as she saw him, and / "What do you want?"

she said in low tones. " Stop where you are, you are positively dripping. "

/ Jacob Engstrand darted a semi-reproachful glance at Regina. / " It's the Lord's own rain, my girl, " he said sententiously. / " It's the devil's rain, I say " was the abrupt reply. p. 36

レギーネは、彼をみつけたとき顔をしかめ、/ 「何の用？」と低い声でいった。「そこにじっとして。ずぶ濡れじゃないの」/ ヤコブ・エングストランは、半分叱るような一瞥をレギーネになげかけた。/ 「ありがたいお湿りじゃねえか。おめえ」と、彼は説教めかしている。/ 「悪魔の雨でしょう」とぶっきらぼうな返答だった。

【林訳】木匠名驚司<sup>ママ</sup>専。竟冒雨至垂丁家。雷迦茵曰。翁一身為雨所淋。幸勿霑湿夫人之室。木匠曰。此雨為救主所賜。女曰。鬼雨也。17頁

大工の名前はエングストランという。雨をついてアルヴィング家にやってきた。ずぶ濡れじゃないの、奥様の部屋をぬらしちゃダメよ、とレギーネがいう。大工が、この雨は救い主からの賜いものだというと、娘は、幽霊雨よと答えた。

細かいところから。エングストランを漢訳して驚司専では、おさまりが悪い。ただし、「専」が「崙」のつもりだったら、これではよろしい。

デル版が、そのせりふ部分にアーチャーの英訳を生かしていることがよくわかる。その扉に、アーチャーの許可を得て訳文を利用した、と明記してあるとおりだ\*7。

イブセン原作は、ここからはじまる。つまり、これより前の部分はデルの創作になる。帰郷するまでのオスヴァルがパリでどのような生活を送っていたか、そこで病気の発症にみまわれたことを時間順に説明するためである。劇中においてオスヴァルがせりふでいうかわりの措置になる。だからこそデルは「序幕」と題して区別した。

デル版は、「序幕」が6章、「劇の内容」が11章だと述べた。合計すると17章になる。林訳は、通しで17章にしている。省略が多いとはいえ、内容はデル版であるのにはかわりはない。

## 結 論

本稿の目的は、イブセンの戯曲を小説化した英文原作があることを指摘することだ。林訳『梅孽』が底本としたのは、イブセン戯曲そのものではないということになる。

探索の結果、デル版、すなわち、イブセンの原作を小説化した英文本の存在が明らかになった。本文を比較対照して内容が同じであることも確認した。

「璫威伊ト森原著、徳爾[デル]改写、林紓、毛文鍾同訳」と書くべきだったのか。いや、正確に表記しなかったからといって、林紓+毛文鍾を責めることはで

きないだろう。それをいうなら、潘家洵訳「群鬼」も同類だ。たしかに戯曲のままに漢訳してはいるが、もつづいた英訳については何も記していない。

問わなければならないのは、そのことを見抜くことができなかつた鄭振鐸の責任の方である。のちの研究者も、鄭振鐸に追隨しただけで検証しようとはしていない。

そこで結論である。

イブセンの戯曲を小説化したと批判した鄭振鐸のほうが間違っていた。林紓+毛文鍾は、無実である。ゆえに、これを林紓冤罪事件のひとつとして認定する。



【注】

- 1) 阿英「易卜生的作品在中国」『文藝報』1956年第17期初出未見。吳泰昌編『阿英文集』北京・三聯書店1981.11. 740頁
- 2) 瀬戸宏『中国話劇成立史研究』(東方書店2005.2.25. 236頁)において「林紓、毛文鍾<sup>ママ</sup>訳『幽霊』(《梅孽》上海商務印書館)」と書いている。毛文鍾の名前を誤っており、原物で確認していないことが判明する。
- 3) 馬泰来「林紓翻譯作品全目」錢鍾書等著『林紓的翻譯』北京・商務印書館1981.11. 95頁
- 4) HENRIK IBSEN "GHOSTS", TRANSLATED BY WILLIAM ARCHER, Copyright, 1890, by JOHN W. LVELL CO. WALTER H. BAKER & CO. BOSTON. p.4

5) 原千代海訳『イブセン 幽霊』岩波文庫1996.6.17. 9-10頁。ノルウェー語原作を底本に英訳本を参照したと説明がある。

6) 『新潮』第1巻第5号1919.12三版。影印本823頁

7) 原文は次のとおり。The dialogue of Mr. William Archer's first translation of Ibsen's play has been drawn on for the purpose of this story by permission, and the Author desires to express his thanks to Mr. Archer for this courtesy.

【附記】本稿は、2006、2007年度大阪経済大学特別研究費による成果の一部である。

清末小説から

『中国古代小説研究』第2輯

人民文学出版社2006.10

“自写風懷”“兼貽史料” 論林紓“時事小説”的認識價值及其藝術創新……韓洪學  
通俗小説傳統在民国時期的發展 ……楊 義  
清末新加坡《叻報》附張的小説  
……〔新加坡〕辜美高、嚴曉薇

木村泰枝 陳思和著「試論：五四新文學運動の先鋒性」について 『中国文芸研究会会報』第300期記念号(297-300期合併号)2006.10.29

平山雄一 【書評】樽本照雄著「漢訳ホームズ論集」 汲古書院2006年9月発行 『大阪経大論集』第57巻第5号(通巻第295号)2007.1.15

無中生有的最早林譯《葛利佛利葛》

馬 泰 來

樽本照雄先生的《清末民初小説年表》(1999), 據所編著《新編清末民初小説目錄》(1997) 重新排列, 讀者對當時小説出版發展, 可謂一目了然。

衆所共知, 林紓翻譯作品最早的是《巴黎茶花女遺事》。可是《清末民初小説年表》於1897光緒22年下有《葛利佛利葛》一種: “《葛利佛利葛(一名海外軒渠錄)》2卷, (英) 斯耐夫特著, 林紓, 魏易譯。上海, 珠林書店, 1897”。較1899年面世的《巴黎茶花女遺事》早兩年。

翻檢《新編清末民初小説目錄》, 得知所據為賈植芳, 俞元桂主編的《中國現代文學總書目》(福州市:福建教育出版社, 1993)。複檢《中國現代文學總書目》, 發現樽本照雄兩書此條全據賈俞目, 未有增減。

珠林書店的本子, 現存賈植芳先生當年工作的上海復旦大學圖書館。這是一本上世紀三四十年代的鉛印本。正確書名是《葛利佛遊記(一名海外軒渠錄)》, 無版權頁, 但有林紓光緒32年撰原序。

很明顯《中國現代文學總書目》工作

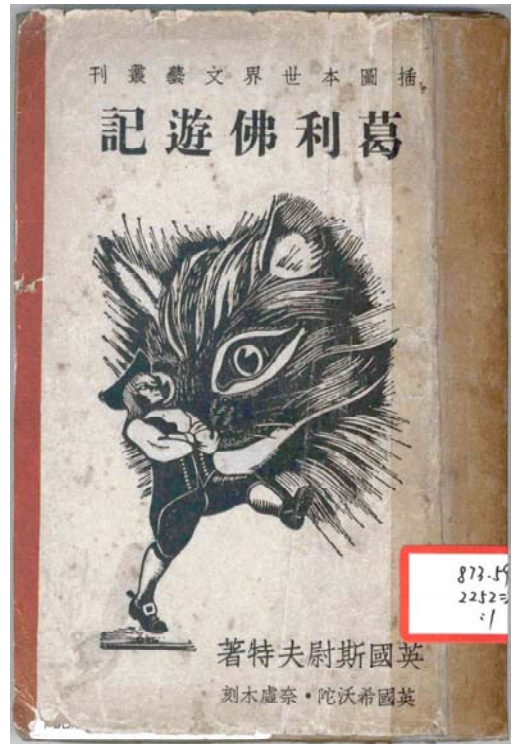


插圖1: 珠林書店本《葛利佛遊記》封面

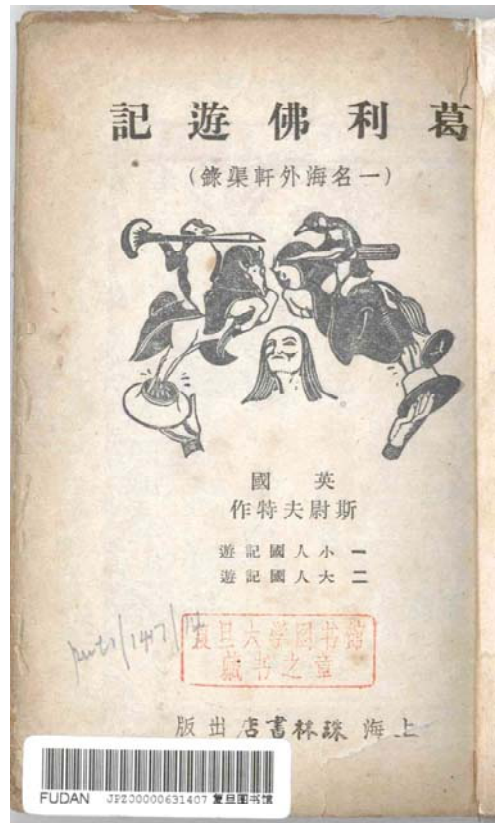


插圖2: 珠林書店本《葛利佛遊記》書名頁

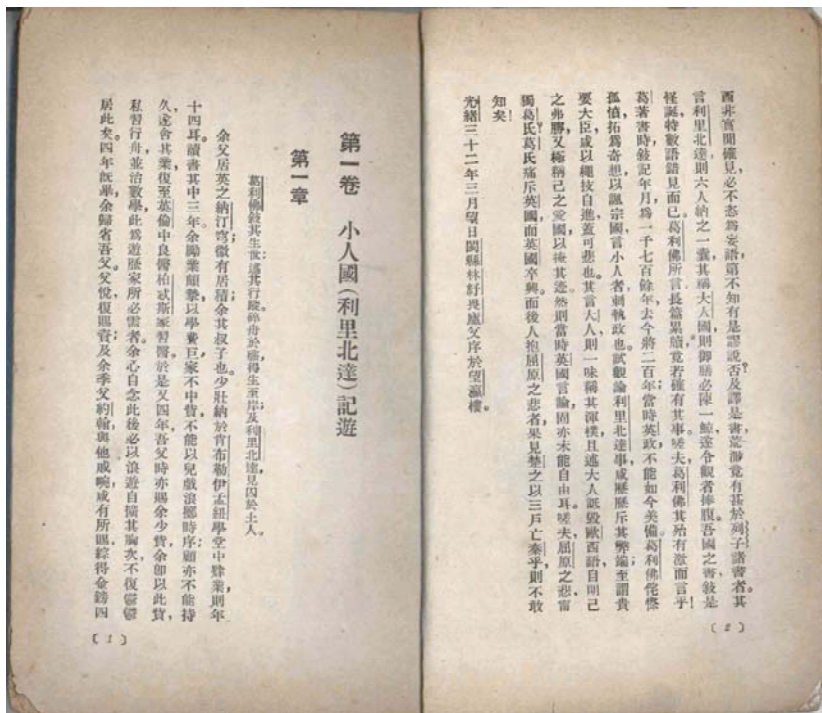


插圖3：珠林書店本《葛利佛遊記》卷首林序



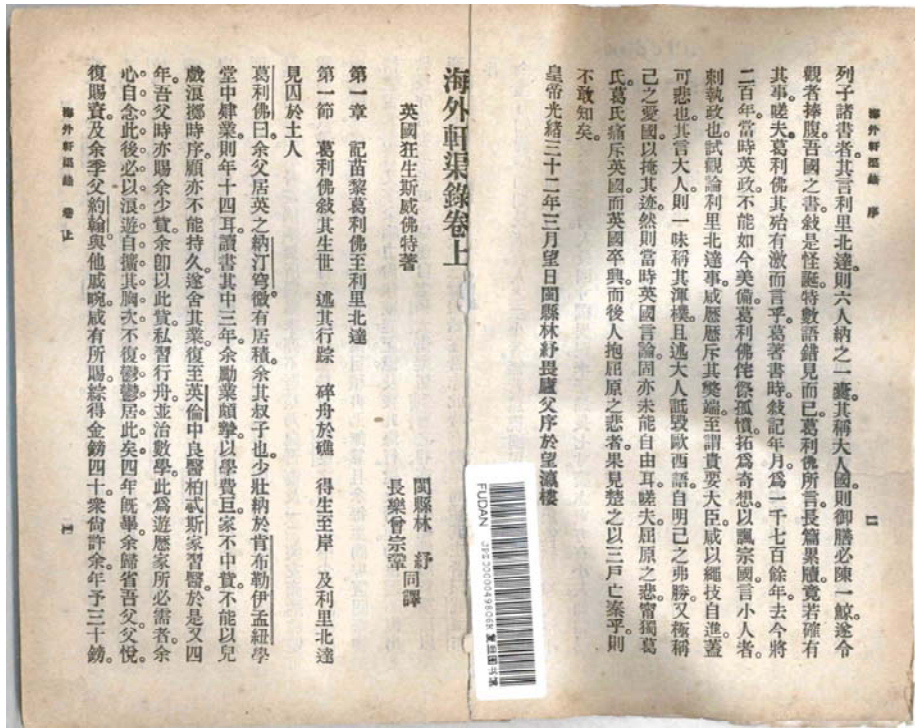


插圖4：商務印書館《說部叢書》本《海外軒渠錄》卷首。

者極不認真，《葛利佛利葛》書名根本不通。由於無版權頁，用了林序年份，但又誤光緒32年為光緒22年。一誤再誤，最後弄出一本光緒22年出版的《葛利佛利葛》。賈植芳，俞元桂兩位主編難辭其咎。

本書的譯者，《中國現代文學總書目》作“林紓，魏易譯”，也有問題。珠林書店的本子並未提到林紓的合譯者，而《海外軒渠錄》的合譯者實不可考。我所見的早期商務印書館版《海外軒渠錄》，卷首皆作：“閩縣林紓，長樂曾宗鞏同譯”，而版權頁則作“譯述者閩縣林紓，仁和魏易”。

珠林書店是上海一間小書店，1939年胡仲持（1900-1968）和馮賓符（1914-1966）等人創辦，出版過一些好書（注），但《葛利佛遊記》的版本不佳。胡亂改書名作者，林譯原署作者“斯威佛特”，不是斯耐夫特。更不好是增刪原文：原書第一章的題目

“記苗黎葛利佛至利里北達”被刪去，而換上杜撰的“第一卷小人國（利里北達）紀遊”。其他文字亦多被改易，如林序署年“皇帝”二字被刪，書首“葛利佛曰”四字被刪。可注意的是本書封面和書名頁，都沒有林紓名字，看來此書的賣點是英人木刻，而不是林紓的古文。

（承復旦大學圖書館吳格，楊光輝兩位教授先後提供書影，謹此致謝。）

注：胡仲持是胡愈之（1898-1986）弟，小傳見《上海出版志》（上海：上海社會科學院出版社，2000），頁1079-1080。許覺民，“孤島前後期上海書界散記”，《收穫》，1999年第6期，頁125：“還有一家出版文藝書為主的珠林書店，出書較少，但很扎實”。

## ピーストンの謎

渡辺浩司

### 1. 「碧珠記」

『小説月報』第八卷第六号(商務印書館1917.6.25)\*<sup>1</sup>に、「碧珠記」なる作品が掲載されている。主人公の霍南・德利谷の独白で語られる物語のあらすじは、以下のとおりである。

霍南・德利谷は、ロンドンの柯娜菱夫人の代理として珍奇な宝石を買っている。だが、実は、寶琳・麥杞鈍(アメリカ女性、20歳くらい)、阿美特・丹佛(パリの詩人)と組んで欧米で活動する、「寶石三巨賊」と呼ばれる泥棒だった。

2ヶ月前、夫人からイタリアに行きブレスレットを買うよう依頼され、購入し、夫人から礼状を受け取ったばかりである。それを読んでいる時、寶琳がパリから訪ねてくる。彼女は阿美特と行動しており、阿美特がパリで知り合ったアメリカの富豪、嘉佛・葛萊白が、夫人の所有する宝石「擲落克碧珠」を欲しがっていることを知らせに

やって来た。その宝石には不吉な来歴があり、夫人は一度も着けたことがなく秘蔵しているが、自分の宝石がアメリカに渡るのを嫌がっているので、夫人の代理でもある德利谷に仲介してもらおうと言うのである。宝石は、舞踏会で使うと言って寶琳がすでに夫人から借り出しており、後で夫人には宝石は紛失したことにし、弁償する、一方で德利谷は葛萊白と直接取引し、弁償金と売却金の差額を三人で分配することとなり、德利谷は寶琳からその宝石を受け取る。

寶琳が帰った後、葛萊白から利得旅館に招かれる。翌日、德利谷が旅館に行くと、寶琳が約翰生という名で葛萊白のタイピストになっていた。交渉で宝石を示すと、葛萊白は大喜びし、六千ポンドで話がまとまり、その晩10時に葛萊白が德利谷の家を訪れ、代金を渡すことになる。旅館を後にし、德利谷は寶琳と阿美特が自分を欺こうとしているのではと疑い始める。

10時に德利谷が帰宅すると、葛萊白がすでに来ていた。そこで、葛萊白は、德利谷が夫人の許しを得ず勝手に宝石を売ろうとしているのではないかと疑い、阿美特とタイピスト(=寶琳)と三人で自分を騙しているのだと言う。二人は争いになるが、葛萊白は拳銃で德利谷を制し、宝石を持ち去る。

残された德利谷は、葛萊白が夫人の家に行きこの件を話すか或いは直接、警察に訴え出るのを恐れ、寶琳に相談

しに利得旅館へ行く。

二人が逃げようとしている所(徳利谷の台詞に「宜急離此間(急いでここを立ち去ろう)」とある)に、阿美特が現れる。阿美特は、葛菜白も実は自分たちと同じ泥棒であると言う。彼は葛菜白を尾行しており、奪われた宝石は尾行に気づいた葛菜白が道端にさっと投げ置いたのを見逃さずに拾ってきたとも言う。そして彼が拾った黒い皮の箱を開けてみると、フランス語で「謹謝盛意(ご厚意に感謝します)」と書かれた紙だけで、宝石は無かった。出し抜かれた阿美特は大いに恥じ入る。

突然、寶琳が、本物の宝石は実は柯娜菱夫人の家にそのままあるのだと言い出す。寶琳が夫人の家を訪れ、宝石を借りようとしたが、結局、許されなかった彼女の独断で偽物を徳利谷に渡したと言うのである。つまり、葛菜白が奪い取ったのは偽物だと言うのである。その時、約翰生(=寶琳)宛に紙包みが届く。中には偽の宝石と「贈君此珠(君にこの宝石を贈る)……」という葛菜白の手紙が入っていた。

阿美特、寶琳二人とも気を落としている時、徳利谷がおもむろに柯娜菱夫人からの礼状を見せ、イタリアでの購入が成功したお礼として昨朝夫人から宝石を受け取った、つまり本物の宝石は実は自分が持っているのだと言う。怒った寶琳に弁解していると、阿美特が、葛菜白を尾行していた時、徳利谷の帰宅よりも約20分早く葛菜白が来て

いたことを話し、その意味に注意を促す。徳利谷が慌てて自宅に電話し、使用人に確認すると、果たして本物の宝石が入った箱は無くなっていた。黙り込む三人であった。

2週間後、新聞にイギリスからアメリカに向かっていた「星靈」号が沈没したという記事が載り、乗客に嘉佛・葛菜白の名を見出す。あの宝石「擲路克碧珠」は、言い伝えのとおり持ち主に不幸をもたらすもので、奪われたことが結局はまあよかったのだと徳利谷は思うのである。

この小説は「小青」の訳で、原作者は「英國弼斯東原著」とある。

訳者「小青」とは、程小青のことで、1893年上海生まれ、1976年没の作家である。作家としては、探偵“霍桑”を主人公とした推理小説で有名であり、また周瘦鷗らとともにシャーロック・ホームズ44作品の翻訳『福爾摩斯偵探案全集』(全十二冊,中華書局1916.5)を出したことで知られる。

そして、原作者のイギリスの「弼斯東」、この人物は中国語音からして Beeston であろう。また、上述の、宝石泥棒の独白という形式や強引などんでん返しを含むストーリーを併せて考えれば、Beeston とみて間違いなからう。

Beeston (,Leonard John)は、イギリスの作家で、1874年生まれ、1963年没。1900年代から1930年代にかけて数多くの短篇作品を雑誌に発表している。しかし、作

者の経歴については知られておらず、『ビーストン傑作集』(中島河太郎編,横溝正史訳者代表,創土社1970.3.25)の中島河太郎「解説」にも、

「生没年も分らなければ、経歴も不詳という作家……生出し活躍した当時からその素性を知られず、その後はまた全く忘れ去られたかのように見える彼の存在は、「幻の作家」と呼ぶにふさわしいかもしれない。」(332頁)

とある。また、ビーストン作「待っていた脅迫者」を載せる『恐怖の地下牢 世界の名作怪奇館6 ミステリー編』(都筑道夫,講談社1970.8.20)の「作家と作品について」にも、

「ロンドンのまずい家に生まれて、やがてカッセルという出版社につとめ、そこで雑誌の編集をしているうちに、自分でも書けそうな気がして、小説を書きはじめた、ということがわかっているだけで、なん年に生まれて、なん年に死んだのか、どこに住んでいたのか、L・Jはどんな名まえを略したもののなのか、いまではまるでわかりません。活躍していたころから、まだ五十年しかたっていないのに。」(113頁)

と述べるだけである。

ただ、特筆すべきは、1920年代の日本で人気があったようで、博文館の大正九年(1920年)創刊の雑誌『新青年』に約70

篇もの作品が翻訳されている。更に、横溝正史「ビーストンの面白さ」同誌第六卷第十号(1925.8.1)や妹尾詔夫「ビーストンの特質」同誌第六卷第十二号(1925.10.1)なども掲載されている\*2。日本の『新青年』は江戸川乱歩や横溝正史といったミステリ作家を輩出したことで有名であるが、同時に海外のミステリ小説を数多く翻訳掲載したことで知られている。

ここで、Beeston の日本での最初の翻訳をみると、前掲中島河太郎「解説」に、

「邦訳第一号は、大正十年の「新青年」のはじめての増刊号に載った。訳者名のない「マイナスの夜光珠」がそれであるが、西田政治氏の筆によった。」(330頁)

とあり、「マイナスの夜光珠」(原題名・原作発表形態不明)が掲載された『新青年』第二卷第九号(1921.8.10)が最初となるのである\*3。

一方、中国での翻訳は、管見に及ぶ限りでは、この「碧珠記」が最初であるから、日本に先立つこと4年である。つまり、日本で盛んに翻訳紹介された Beeston であるが、中国語にも訳されており、意外にもその紹介は中国の方が早かったのである。

この「碧珠記」であるが、まだ大きな謎が残っている。それは、原作は一体何かということで、まだ見つかっていないのである。

謎解きの手がかりはある。主人公の

「霍南・德利谷」は、中国語音から Beeston 作品の人物と比較してみると、Hon. Derek ではないかと推測している。彼の登場する作品は今のところ、「The Game As Played」(『The Red Book Magazine』vol. 20 no.5(1913.3)未見)が唯一知られている\*4。『The Red Book Magazine』はアメリカ・シカゴで1903年に創刊された雑誌であり、Beeston が主にイギリスの雑誌で活躍していたことを考えると、転載かも知れない。また、Beeston 作品には主人公が同一の短篇シリーズも多いので、「The Game As Played」=「碧珠記」とするのは早計であろう。

ただ、他に手がかりも無いので、この系をたぐるつもりであるが、古今東西、雑誌の宿命は「読み捨て」であるから、この謎の解明はまだまだ時間がかかりそうである。

## 2. 「波譎雲詭録」

「碧珠記」が掲載された翌月から3か月にわたり、すなわち『小説月報』第八巻第七号(商務印書館1917.7.25)、第八号(1917.8.25)、第九号(1917.9.25)に、同じく「英國弼斯東原著」の「波譎雲詭録」が掲載された。

訳者は「小青」「君復」となっている。「小青」は、前章で述べた。「君復」は、『中国近現代人物名号大辞典』(陳玉堂編著,浙江古籍出版社1993.5)696頁によると、姚民哀のことで、数多くのペンネームを持ち、1910年代から新聞・雑誌に小説等

を発表している。

さて、「波譎雲詭録」の内容であるが、主人公の安那・洛白徳の一人称で語られる物語のあらすじは、以下のとおりである。

## 第一章

拍靈街の奥福森宅で、私(安那・洛白徳)は亨利・奥福森とクラ林の三人でトランプをしていた。午前1時になり、私が帰ろうとした時、奥福森に止められる。彼は、私と彼の妻(伊瑟兒)との関係を知っており、彼と私とのどちらかが一方の前から永久に消えることを提案し、私も受け入れる。

## 第二章

その方法は、トランプで負けた方が柏徳芬街22号の霍伯・約翰生宅に絵を盗みに入ることで、その家は防犯がしっかりしており、かつ奥福森宅からも20分後にそこへ電話で知らせるので、盗みに入れば必ず捕まり、もう二度と今の社会的地位に戻れないのである。私はその勝負に同意し、トランプ勝負で負けてしまう。

## 第三章

私が約翰生宅に忍び込むと、壁に伊瑟兒と私の肖像画がかかっていた。いぶかしく思っていると、電話が鳴り出す。電話を止めようと部屋に入ると、何と約翰生が血を流して死んでいた。逃げようとする、誰かが無言で殴りかかってきた。首を絞められたが、応戦して、屋敷を脱出した。ほぼ同時に警官も現れ、呼び止められそうになっ

た時、女性の乗った馬車が停まり、手招きしているので、それに飛び乗った。

#### 第四章

逃げ切れたが、その女性(喬珊・希娜而)は誰かと私を間違えたので早く降りるよう言う。私は彼女に協力を求め、それに応じた彼女と晩6時に会う約束をし、自宅へ戻る。後、食事に出て戻ると、伊瑟兒から「危険だから早く逃げろ」との手紙が来ていた。先に喬珊との約束があるので、会いに出かけ、途中、事件についての新聞記事(「使用人の彼得はその夜、外出しており、その妻は銃声に怯えて部屋を出なかった」「約翰生の甥の亨利・奧福森の話では、故人には敵も無く、財産を狙っての犯行だろう」等)を読む。待ち合わせの駅に向かおうとすると、朝にも見かけた60歳近い老人がいた。

#### 第五章

老人とは何も無く、私は喬珊と会う。彼女の話によると、彼女の父はかつて船乗りで、約翰生と付き合いがあったが、友人ではなく、約翰生が弱味を握られているようだった。昨夜、父が拳銃を持って出かけ、1時になっても帰宅しないので、彼女は馬車で約翰生宅まで行き、そこで誤って私を助けたのだった。更に、父の話として、約翰生と甥の奧福森の仲は悪く、約翰生は遺産を昔、愛していた女性の息子に残すことにし、その息子の名が安那・洛白德(=私)だと言う。

ここで、私は、奧福森、克拉林、伊

瑟兒の三人が共謀し、約翰生を殺し、私にその罪をかぶせようとしていると考える。喬珊の父もまだ帰宅せず行方がわからないので、二人は引き続き協力することにし、喬珊の父の仲間毎晩家に来る男に狙いをつける。

#### 第六章

晩に私がその男を待つために喬珊の家に行くと、老人をまたまた見かける。老人は喬珊の父ではないかと思った時、喬珊から合図があったので、家から出て来た男を尾行する。すると、老人もその男を尾行している。川沿いに出て、街灯に照らされたその男を見ると、克拉林だった。老人は克拉林に会い、言葉を交わすと、克拉林を川へ投げ込み、その場を去った。

#### 第七章

私もその場を去り、翌朝、喬珊宅を訪れ、昨夜の出来事を話す。喬珊もその老人の服装から父だと気付く。また伊瑟兒から喬珊宅に私宛の手紙が来ており、すぐに自分の所に来るようとの内容だった。

喬珊に勧められ、怪しみながらも奧福森宅へと向かう。伊瑟兒は、すべて

約翰生の遺産が私に渡るのを妨げるため、亨利・奧福森が克拉林と組んで彼女も引き込み、パリで私と知り合い、私と彼女が恋仲になり、それに亨利が怒り、トランプのごまかし勝負で私に約翰生宅へ盗みに入らせるようにしたことを打ち明けた。しかし、三人とも殺人とは無関係だとも話す。

更に、愛するふりが今では本心になり、一緒に逃げようと訴え、応じてくれなければ、私を殺人犯として告発する手紙を警察に出すと言う。

私は断り、手紙が女中に渡され持って行かれるのを見て、部屋を出る。外には奥福森が立っていたが、お互い何も言わず、私は家を出る。

## 第八章

私は喬珊宅を訪れ、奥福森宅での出来事を話す。後、喬珊は次のようなことを話す。12年前、パリで有名な絵が盗まれ、めぐりめぐって約翰生の手に入り、それを売って大儲けし、その儲けを喬珊の父と克拉林の三人で分けた。約翰生は、その後、仕事熱心になり、巨富を築いた。それを知った二人が過去をネタに金をたかるようになったのだと。そして、喬珊は、殺人犯は自分の父だと言い、警察に申し出ると言う。私はそれを止め、彼女に累を及ぼさないためにイギリスを去ると言い、二人は別れる。

私は南米に行くため、切符を買いに向かう。その途中のバスで、料金を払おうとポケットを探るとアルファベットの刺繍入りのネクタイが出て来た。あの晩、格闘した時、知らないうちに相手から奪い取ったものだった。格闘相手は希娜而(喬珊の父)に違いないと考えながら着いた切符売り場にはその希娜而がおり、港への汽車について尋ねていた。そこで、私は二つのことに気付く。

そして、電報で喬珊を港行きの汽車

が出る駅に呼び出し、プラットフォームで彼女を待った。すると、希娜而と奥福森が現れた。二人は汽車に乗るのを止め、車に乗った。喬珊が来たので、車中の人を確認させると、老人は希娜而ではなかった。

## 第九章

私は喬珊と分かれ、二人を追って車に乗り、港へ向かった。途中、二人の車が宿屋の前に故障で停まっていた。私も少し進んでから車を止め、二人の後を追った。二人は宿の裏庭の亭におり、私は気付かれぬように近づいた。二人は、「伊瑟兒が警察に出そうとした手紙は女中から取り上げたこと」「私(洛白徳)が捕まれば、すべてが露見してしまうこと」などを話している。後、老人が奥福森に、ここで車が故障したのも計画で、自分を殺して近くの池に沈めるのだらうと言う。怒った奥福森が殴りかかろうとすると、老人は私(洛白徳)がここにいることを話し、現れた私を見て奥福森は池に落ちる。

その老人は、実は霍伯・約翰生だった。私は、ネクタイのイニシャルの刺繍と切符売り場で見た海の男ではない白い手から分かったと言う。

そして、約翰生は次のように話した。希娜而が死んだのは殺人ではなく、彼の銃が暴発したためである、ただこの事件から自分の過去が公になるのを恐れ、服を取替え(ネクタイは忘れていた)、私と格闘した後、奥福森宅に行った。奥福森は、このまま約翰生が死んだこ

とし、本人は南米に行って永久に姿を隠すことを勧めた。約翰生もいい考えがなかったので、やむなく了承し、おかげで今晚、奥福森に狙われたが、私のおかげで助かった等々。

1週間後、約翰生は弁護士と共に自首し、すべてを供述し、無罪になった。その後、南米へ渡った。喬珊は父の死を悲しみ、私がそれを慰めているうちに、二人の間に愛情が生まれ、結婚することになった。結婚当日、私は訪ねて来た伊瑟兒と別れの言葉を交わした。

このあらすじを読めば、Beeston のファンなら気付かれると思うが、同じ内容の作品が日本語訳にも見られるのである。

それは「二枚の肖像畫」と言い、『新青年』第八卷第一号(博文館1927.1.1)、第三号(1927.2.1)、第四号(1927.3.1)、の、やはり三号にわたって延原謙訳で連載された\*5。

原作について、『小説月報』『新青年』ともに何の記載も無いが、日本語訳の方が1935年に単行本で黒白書房から出版された時に、表紙と扉頁に「Portculis Square Mystery」と見える。実際の地名から、正しくは「Portcullis Square Mystery」であろう。延原謙調査「歐米探偵作家著作目録」(『新青年』第七卷第三号1926.2.10)414頁「Beeston, L.J.」の項も“Portcullis”に

作る\*6。つまり、これが、「波譎雲詭録」の原作名であろう。

これで一件落着と言いたいところであるが、まだまだ謎が残っている。一つ目の謎は、この「Portcullis Square Mystery」がいつ、どこで発表されたのかということである。妹尾アキ夫「ピーストンに就いて」(『別冊宝石』第六卷第七号,岩谷書店1953.9.15)には、

「プレミアに三回にわたつて中篇が連載されたことがある。よく覚えていないが、たしか延原君が訳したはず。」(6頁)

とある。しかし、上記「二枚の肖像畫」以外に、「幻の遺書」という作品も延原謙訳で『新青年』第十二卷第六号(1931.5.1)、第七号(1931.6.1)、第九号(1931.7.1)の三号にわたって連載されており\*7、一つの手がかりではあるが、やはり「プレミア」誌掲載と断定するわけにはいかない\*8。結局のところ、“1917年以前の、恐らくはイギリスの雑誌”という甚だ頼りない線から謎を追わねばならない。

もう一つ謎がある。それは、主要人物名と一部の地名の中国語訳と日本語訳が、音から見て一致しないことである。大きく異なるものを以下に掲げる。便宜上、中国語の下に発音のカタカナ読みを示す。

中国語	日本語*9
安那・洛白徳(アンナ・ルオバイトオ)	アシユビ・ライニンガア
亨利・奥福森(ヘンリ・アオフセン) * “亨利”は Henry に当たる	ハマンド・スカアルス
克拉林(コオラリン)	メリス



伊瑟兒(イソォアル)	レーチエル
霍伯・約翰生(フオボ・ユエハンション) * “約翰生”は Johnson に当たる	ハマン・クロムウエリス
喬珊・希娜而(チアオシャン・シーナアル)	ジヨイス・アナリング
柏德芬(ポートォフェン)街	ポートカリス・スコエア

同じ原作に基づいたものとは思われないほど違っているが、Beeston(或いは出版・編集者)による、登場人物名を変えた二重発表があったのだろうか、それとも訳者が勝手に人物名を変えたのであろうか。看過できない謎である。

その他に目に付いた違いといえば、章立てで、中国語訳は上述のとおり9章だが、日本語訳は「十」に分かれている。前者の第七章が後者では「七」「八」に分かれており、以下、中「第八章」=日「九」、中「第九章」=日「十」となる。また、日本語訳では「一、黄色い薔薇」のように章題があるが、中国語訳には無い。

それから、中国語訳では最後に亨利・奥福森が亡くなっている。一方、日本語訳ではハモンド・スカアルスは生きている。以下に示す。

伊瑟兒答曰。吾夫已死。……(『小説月報』第八卷第九号36頁)

(伊瑟兒は答えて「私の夫はすでに亡くなりました。……)

「…あの方にとつてハモンドなんかはもう死んだも同然です。…」(『新青年』第八卷第四号287頁)

いずれにせよ、ストーリーには影響しな

い。その他の細かな違いについては、原作を見て、両訳の出来を比較しながら指摘したい。

原作掲載雑誌の謎と登場人物名の謎、どちらも解明までには、やはりまだまだ時間がかかりそうである。

### 3.まとめ

原作の確認には至らなかったものの、「弼斯東」が、イギリスの作家 Beestonであることを明らかにした。そして、日本で盛んに翻訳された彼であるが、上陸は中国の方が4年も早かったということがわかったわけである。

江戸川乱歩の随筆に「福爾摩斯偵探案全集」『探偵作家クラブ会報』第三十号(岩谷書店内「探偵作家クラブ」1949.11.20)がある\*10。そこでは、1919年中華書局刊『古今怪異集成』の広告に見える、表題の『福爾摩斯偵探案全集』を簡単に紹介したあと、

「中国は探偵小説では日本より遙かに遅れてあるといふのが常識だが、少くともホームズの翻訳では向ふの方が進んでゐたことが分り、ちよつと意外に感じた。」(6頁)

と述べ、また、1914年商務印書館刊『舊小説』の広告に見える“偵探小説”を同じく簡単に紹介したあと、

「以上は大正三年の広告、ホームズ全集にしても大正八年だから、「新青年」創刊より早く、この調子でつづいてみるとすると、其後は相当進んだ偵探小説も出てゐるのではないかとも思はれる。中国帰りの人達が云ふやうに、中国は公案もの(裁判小説)ばかりが流行してゐるわけでもなさそうである。」(7頁)

と推理している。

「碧珠記」、「波譎雲詭録」の掲載は1917年、つまり翻訳について言えば、ホームズ以外にも、「其後」ではなく、すでに中国の方が進んでいる状況があったのである。それも、乱歩自身が Ellery Queen に教えたという逸話<sup>\*11</sup>があるほどの Beeston だけにより面白く感じられる。



【注】

- 1) 『小説月報』は東豊書店の影印『小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止』(1979.10)を使用した。影印には奥付が無いので、発行年月日については、『新編増補清末民初小説目録』(樽本照雄編, 齊魯書社2002.4)を引用した。以下同。
- 2) 『新青年』は本の友社の影印『「新青年」復刻版』(1999.3.10)を使用した。
- 3) 訳者の西田政治の随筆「翻譯道樂三十年」『探偵作家クラブ会報』第三十六号(岩谷

書店内「探偵作家クラブ」1950.5.25 - 柏書房の影印『探偵作家クラブ会報(第1号～第50号)』(日本推理作家協会編1990.6.25)を使用)に、「マイナスの夜光珠」(原名黄色のマイナス)を発表してから、新青年はビーストン時代となつた。」(5頁)とあるが、“黄色のマイナス”は日本語なので、結局、英語の原題は不明である。また、この作品に限らず、Beeston の翻訳はほとんどが原作不明である。なお、「マイナスの夜光珠」は、戦後には『新青年傑作選4 翻訳編』(西田政治著者代表, 中島河太郎編, 立風書房1970.1.25)や前掲『ビーストン傑作集』に再録され、また同じ西田訳で子供向けに表現を改めたものが「マイナス家の黄色ダイヤ」として『世界少年少女文学全集 46 推理小説集』(水谷準訳者代表, 東京創元社1955.8.31)にも収められている。

- 4) William G. Contento管理ホームページ「The FictionMags Index」参照。
- 5) 『新青年』は本の友社の影印『「新青年」復刻版』(1993.7.25)を使用した。
- 6) 『新青年』は本の友社の影印『「新青年」復刻版』(1998.9.10)を使用した。
- 7) 『新青年』は本の友社の影印『「新青年」復刻版』(1995.8.25)を使用した。
- 8) 「プレミア」は『The Premier Magazine』で、1914年にイギリス・ロンドンで創刊された月刊誌。前掲の中島河太郎「解説」に、「彼(= Beeston - 筆者注)の作品は、「ストランド」、「プレミア」、「グランド」を主として……発表された。中でも「プレミア」と「ストーリー・テラー」には、主人公が同じの連続短篇が載ったりして、相当に活躍している。」(330-331頁)とあり、私にとって真っ先に確認したい雑誌の一つである。
- 9) 『新青年』も黒白書房単行本も同。

- 10) 『探偵作家クラブ会報』は柏書房の影印『探偵作家クラブ会報(第1号～第50号)』(日本推理作家協会編1990.6.25)を使用した。
- 11)江戸川亂歩「クイーンの定員」その他 - 米、佛の日本探偵小説への關心 - 』『寶石』第六卷第十二号(岩谷書店1951.12.1)参照。

【参考文献・ホームページ(HP)】

David Reed 『The Popular Magazine in Britain and the United States 1880-1960』  
The British Library 1997

John Tebbel, Mary Ellen Zuckerman 『The Magazine in America 1741-1990』  
Oxford University Press 1991

梁淑安主編 『中国文学家大辞典 近代卷』中華書局1997.2

William G. Contento 管理HP「The Fiction Mags Index」  
<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2007年4月1日確認)

N・M卿管理HP「ミステリー・推理小説データベース Aga-Search(アガ・サーチ)」  
<http://www.aga-search.com/> (2007年4月1日確認)

中国近代文学研究 『留得』 第11期(2007.1)

『劉鶚集』の刊行を予告する。鍾賢培はアメリカに、姜東賦はカナダに滞在中などの消息を掲載する。

中国近代文学研究 『留得』 第12期(2007.3)

主として鍾賢培の業績を特集する。

“ 夢 湘 先 生 ” 點 滴

武 禧

劉鶚在《老殘遊記》中寫到“夢湘先生”。“夢湘先生”確有其人，姓王名以懋，又名以敏，字夢湘，一字子捷。湖南武陵人。清咸豐五年(1855)，生於濟南，1921年卒於武陵。筆者曾引其《槩塢詩存》以證之。今見上海古籍出版社出版之“中國近代文學叢書”易吳庵《琴志樓詩集》有與王夢湘唱和多韻，未加考證，擇數首，以供研究：

送王子能以懋、夢湘以懋兄弟返山左

落花風不住，嘶騎又天涯。  
破篋安吟草，殘燈選夢華。  
春余鵲有淚，客久燕無家。  
后夜愁煙雨，明湖萬柳斜。

(《琴志樓詩集》p.19)

寄懷王夢湘以懋濟南

京華別后等勞薪，回首櫻花二月春。  
淺淺論交因有母，茫茫對哭亦無人。  
狂奴意氣傳聞過，才子文章感慨真。  
太白樓高休獨倚，醉吟猶恐動星辰。

(《琴志樓詩集》p.97)

### 王郎行寄夢湘山東

王郎手把芙蓉花，長身玉立恆河沙。  
青琴爲知己，錦瑟爲年華。聲名動白云，  
意氣凌紫霞。出口吐奇鳳，當胸握靈蛇。  
南去丹山覓竹箭，東來碧水回蓬查。謂當  
撒大蘇炬、乘小宋車，詠階前紅藥，宣閣  
上黃麻。而乃鳳泊鸞飄駿馬瘦，才人四海  
歸無家。歌不必斫地哀，表不必通天詭，  
醒不必求金丹，醉不必讀青史。時來豎子  
皆英雄，運盡皇王亦山鬼。三五六經聖賢  
窮，十二萬年仙佛死。名山塵海煙有無，  
曠代清愁可消矣。古往今來盡如此，爲君  
上指百變莫測之浮雲，下指一去不還之流  
水。行歌坐哭胡爲哉，何時使我心顏開。  
逝將西縶馬於闐風，東釣鰲於罟萊，南探  
朱火之祕洞，北登黃金之高臺，茫然四顧  
生悲哀。但覺古今悲歡離合可歌可泣事千  
萬，一一遠自斜陽秋草之間來。背負青天  
遊八極，近日中原看不得。淮河水倒流，  
晉豫人相食，齊魯疆連亦災國。幸逢慈聖  
請命殷，龍顏半爲蒼生黑。君王遠邁漢唐  
朝，兒女應蒙堯舜澤。露坐風餐金爵殿，  
云移電轉銅駝陌。昨夜夢君不自聊，秋滿  
齊州踏煙立。憶昔與君同妙年，五陵裘馬  
爭翩翩。醉向酒家樓上眠，此時意態如神  
仙。長安卿相直一錢，豈知上第同登天。  
致身富貴非無術，憎命文章太有權。君策  
兗州騎，我登滄海船。路旁拱手不相顧，  
黃塵白日迷幽燕。聚處猶嫌疏，況乃離居  
一萬里；途人猶恨別，況乃同心二三子。  
我有徑寸珠，襲以千端綺。心欲寄君悵莫  
由，甘埋冷月荒潭底。古怨時時作霞起，

君歸濟南經任邱，兩地皆有太白之酒樓。  
我行更在極西夜郎天盡頭。先生當日此地  
流，有樓亦占牂山陬。二客登臨倘同日，  
翻恐往還鯨背難爲酬。奪公手中五色花天  
筆，借公胸中萬頃云海秋。眞靈位業不能  
以倖致，或者才名落落尚可人間求。狂歌  
痛飲偶然事，醉態不共風煙收。豈知今日  
有吾輩，意氣公然橫九州。自古仙才和淪  
謫，人生醉耳吾何憂。君聞此言會一笑，  
精魂更作西天遊。昨歲得君書，手未開緘  
淚橫睫。和我天寧詩，寸紙光芒發。西風  
人海別經年，酒夢雖寒心尚熱。無端一讀  
一纏綿，燈前字字堪頭白。荊卿市，黃公  
鑪，素箏濁酒悲來乎！君家元方玉樓杳，  
神姦夜起驚三珠。俊遊甫疏弱一個，更數  
年后將何如？我今散髮蠻瑤瘴癘區，感君  
涕淚安能無。君勿爲吳質愁，君無爲唐衢  
哭，君勿從李廣射，君勿從屈原卜。且餐  
鵲華嵐，且飲明湖淥。且將泰嶽三千余里  
洞盡探，且將封禪七十二家書盡讀。他年  
給札玉堂來，一變傷心才子局。年少落拓  
空能狂，夢中煙月疑歡場。平生同調憶僅  
僅，今我獨立愁茫茫。前咆熊羆后虎豹，  
東飛鴛鴦西鷺鷥，安得挾汝置我旁。

(《琴志樓詩集》p.98)

### 都門感舊書懷贈王兄夢湘四首

- (一) 京落承平兩少年，當時罪狀在金荃。  
同標南國無雙目，各寫東皇太極篇。  
日下云間爭跌宕，露初星晚致流連。  
鬢絲禪榻青春夢，化作茶煙與藥煙。
- (二) 羨爾長安奉板輿，玉堂談上故人居。  
汗青東觀呼仙犬，眉黛西山喚蹇驢。  
畫壁雙鬟王賭酒，閉門半臂宋修書。

碧鷄持節歸金馬，也出平生涕淚余。

(三) 別后風塵眼倦開，昭王臺換孝王臺。

死遭黃祖翻爲福，生嫁烏孫倍可哀。

胡地草青曾寄語，匡山頭白早歸來。

誰知萬念成灰后，尚被天公溺死灰。

(四) 執手相看痛哭頻，殘軀豈意蹋京塵。

眞同一只遼東鶴，不是三千界里人。

蘇武丁年長墮淚，羲之丙舍更傷神。

君如愛我宜生祭，早結他生未了因。

(《琴志樓詩集》p.594)

### 贈安侍御維峻和夢湘韻

一伏青蒲國體尊，豈隨世態作寒溫。

冰霜日月皆天眷，雨露雷霆盡聖恩。

終見朱云能悟主，不勞宋玉與招魂。

賜環百日先朝事(嘉慶初洪亮吉事)，

重向丹階印膝痕。

(《琴志樓詩集》p.595)

### 與夢湘別

交情蘇李廿年論，淚到河梁不可吞。

碧草綠波猶恨別，紫臺青塚更銷魂。

秋筇異日蒐遺集，春夢今生贖斷痕。

做佛公車前度否，蹇驢破帽出都門。

(《琴志樓詩集》p.599)

《琴志樓詩集》(上下册) 易順鼎著 王颯

校點 責任編輯 李保民

上海古籍出版社2004年4月出版



『清末小説』第30号は10月ころ発行予定

『清末小説から』第87号の公開は10月予定

晚清小説作者掃描(拾卷)

武 禧

(零四九)

郭小亭

小説創作：濟公活佛傳

郭小亭：未見任何著錄。

(零五 )

笑翁

小説創作：羊石園演義

笑翁：未見任何著錄。

《羊石園演義》一書的原作、作者、序作者中出現了許多人名：七弦河上釣叟、頑叟、笑翁，又涉及張志祺、華廷傑、潘伯揚、蘇器甫(若瑚)、濃影小郎等。其中可以查到的。有二1、“七弦河”：地名，系現在的常熟。因此基本可以知道“釣叟”爲常熟人。2、蘇器甫(1856-1917)：名若瑚，字器甫，號簡園。廣東順德人。光緒四年舉人。后從順德人禮部侍郎李文田學蒙古史地。有《蘇簡園印存》。

《羊石園演義》據七弦河上釣叟撰《英吉利廣東人城始末》寫成。《英吉利廣東人城始末》全文較長，將其最后一節錄

於后：

記者曰：當世論夷事者，咸太息痛恨於漢陽，斥之爲大辱國。自咸豐庚申后，余往來南北十余年，遇粵人及曾爲粵客者，輒詢當日情狀，瑣屑必記。嗣見永嘉張茂才志瑛詳述入城始末，凡數萬言。茂才父官粵時，漢陽沮抑，甚有怨言也。最后乃見崇仁華觀察廷傑日記，觀察於漢陽能不負生死者也。於是盡取所記句櫛而字比之。諸說同者，可信也。此或詆之，彼有怨詞也(者)，亦可信也。其他猥鄙、誹訕、怨憤之語盡刪之，而爲是記。漢陽高語鎮靜，矜氣驕志，坐誤事机，身爲俘虜，是則然矣，然夷所欲得而甘心者也。使其昏懦流媚，無足爲我梗，夷直藐之而已，必不惡漢陽也。惡其爲梗，疑其有仇夷之心故也。心仇夷而術無以制夷，乃蔑視夷，以爲夷無如我何，此漢陽之所以敗也。辱身以辱國，且至蕩搖邊疆而無能善其后，漢陽之罪大矣。夷竟不可仇乎？必不敢仇夷而畏夷，惟夷言是從，由由然以爲必不辱國之道在是也，不敢知亦不忍言也。夫漢陽固自以爲天下莫己若者，潰敗決裂乃至於此，何也？爲山崇高而絕砂礫之附，植根廣大而失枝叶之觀，身比獨夫，擲成孤注，所謂拒人於千里之外，與讒諂面諛之人居也。倚張同云爲腹心，奉新聞紙爲蓍蔡，命懸於乩語，謀決於籤詩，其蔽至於斯也，知其左右無一人也。禍變將作，力排衆議，固執己意，誠債事矣。強敵壓境，醉夢同之，城陷民散，俯首帖耳以延食息者，何爲其然也？故平心氣，綜前后察之，漢陽之罪不可道，心猶可原也。是將仇夷不足制夷，爲夷所惡以至於此。能畏夷，惟夷言是從，或相安至今，未可知也。此當世所以集矢於漢陽也。伏讀顯皇帝諭曰：“叶名琛剛愎自用”。至哉聖言，當其罪矣，使去其所爲自用者，雖仇夷可也。

(零五一)

小山居士

小説創作：《年羹堯平西傳》《平金川全傳》(又名《年大將軍平西傳》)

小山居士：姓張，名(字)小山。遼東人。書《序》稱之“上舍”，應爲監生。祖父張嘉猷曾充年羹堯幕，著《西征日記》兩卷。張小山據《西征日記》成《平金川全傳》。

(零五二)

陶炳南

小説創作：《三祥報》

陶炳南：不見任何著錄。

(零五三)

燕山逸叟

小説創作：《南朝金粉錄》

燕山逸叟：號“逸叟”者，有左宗堂季子，名孝同。湖南湘陰人。生於1857年。就生卒年而言，尚可；就籍貫而言，“燕山”應爲河北與湖南不相關。待考。

(零五四)

二春居士

小説創作：《海天鴻雪記》

二春居士：署名“二春居士”的小説作品僅《海天鴻雪記》一部。然對“二春居士”的真實姓名有不同意見。阿英、陳玉堂等持“李伯元”說。以至江蘇古籍出版社出版之《李伯元全集》亦將其收入。魏紹昌雖將其編入《李伯元研究資料》但亦提出質疑。而《中國通俗小説總目提要》以爲二春居士並非李伯元。其原因有四：1、籍貫不同，2、著作年代與李伯元生卒時間不符合，3、吳趸人未提及李伯元

有此作品，4、著作風格與李伯元不同。存疑待考。

(零五五)

凱江省三子

小説創作：《躋春臺》

凱江省三子：名劉省三。凱江，約在四川成都、綿陽、中江處。因此推斷其為四川人。

此書作《序》之林有仁（1836-1920）四川中江人。字愛山，號新甫，學者稱其龍溪先生，專攻理學，著有《龍溪先生年譜》。作者自署“凱江”，《序》作者為中江人。籍貫相吻合。

但是此《序》云“中邑劉君省三，隱君子也”。查“中邑”為古地名，系現代河北一帶。因此估計劉省三祖籍河北。

(零五六)

古潤野道人

小説創作：《捉拿康梁二逆演義》

古潤野道人：未見任何著錄。



清末小説から

劉麗華 不愉快的師生論争 審視胡適与張厚載的一段公案 『魯迅研究月刊』2005年第11期 2005.11.20

許桂亭 (『林紆文選【注釈本】) 前言 『林紆文選【注釈本】』天津・百花文藝出版社2006.10

馬泰來 羅香林教授和我的林紆翻譯研

究 『羅香林教授与香港史学 逝世二十周年紀念論文集』羅香林教授逝世二十周年學術研討會籌備委員會2006.10

謝曉霞 『《小説月報》1910-1920：商業、文化与未完成的現代性』上海三聯書店2006.11

馬祖毅等 『中国翻譯通史』全5卷 武漢・湖北教育出版社2006.12

顏廷亮 新發現的黃世仲小説《義和團》 『明清小説研究』2006年第2期(總第80期) 2006發行月日不記

劉德隆 出房・堂備・寅半生 『明清小説研究』2006年第2期(總第80期) 2006發行月日不記

趙連昌、戴激光 清末政治小説中民族国家想像的迷失 『明清小説研究』2006年第4期(總第82期) 2006發行月日不記

秦艷華 趙家璧的“選択”意識与《中国新文学大系(1917-1927)》 『編輯學刊』2007年第1期(總第111期) 2007 刊行月日不記

柳青 重視晚清通才伝奇人生 《劉鶚集》為研究清末社会提供宝貴材料 『文匯報』2007.1.4

樽本照雄の本

清末翻譯小説論集

A5判 上製 箱入り 414頁 限定150部

定価：8,400円

## 阿英『晚清小説史』ほか索引

清末小説研究資料叢書10 B5判 83頁

限定200部 定價：2,100円

## 商務印書館研究論集

A5判 上製 箱入り 320頁 限定150部

定價：7,350円

## 漢訳アラビアン・ナイト論集

A5判 上製 箱入り 282頁 限定200部

定價：6,300円



范伯群

『中国現代通俗文学史(插图本)』

北京大学出版社2007.1

序一 賈植芳

序二 李欧梵

緒論

第1章 中国現代通俗小説の萌発

第2章 19世紀末20世紀初上海小報潮

第3章 1902-1907年：中国現代文学期刊第一波

第4章 1903年：晚清譴責小説“啓動”年

第5章 1906年後：写情小説与哀情小説の湧現

第6章 1909-1917年：中国現代文学期刊第二波

第7章 改朝換代与宮闈歴史演義小説興盛之關聯

第8章 1916年：“問題小説”之引進与“上海黑幕”之徵集

第9章 1921年：《小説月報》の改組与通俗期刊第三波高潮

第10章 20年代狭邪小説“人情”、“人道”化的新路

第11章 20年代民国武侠小说の奠基及早期作家

第12章 為都市伝真留影の20年代社会小説作家群

第13章 都市郷土小説 現代通俗文学の一大特色

第14章 20世紀20年代電影熱与画報熱

第15章 20世紀20年代偵探小説中国化的定格

第16章 20、30年代之交、北方通俗文学の迅速崛起

第17章 抗戰勝利前後の北方武侠小说

第18章 層次不等的30、40年代上海社会小説家

第19章 40年代新市民小説の通俗性

第20章 歴史の経験教訓還需作進一步探討

覓照記(代後記)